



「千代田区産業振興基本計画」 (2023年度～2027年度) と神保町の未来 専修大学商学部教授 渡辺 達朗様

紹介者 木宮 雅徳会長

「千代田区産業振興基本計画」は2023(令和5)年度から2027(令和9)年度までの5年間を対象に、区の商工業や観光産業の基本的な方向を展望するものである。本計画は、千代田区商工振興方針及び千代田区中小企業振興基本条例に基づいており、今回、かつての「千代田区商工振興基本計画」に「千代田区観光ビジョン」を統合するかたちでまとめられた。渡辺は、千代田区商工連絡調整会議(事務局は商工観光課)の座長として、副座長の高山肇氏とともに、本計画のとりまとめにあたった。本計画では、第4章「産業振興基本計画における方向性」において、基本理念を「ちよだの暮らしを豊かにし、まちのステイタスを高める産業まちづくり」と定め、次の4つの基本方針を掲げている。

基本方針1

千代田区の立地を活かした中小企業等の振興

基本方針2

千代田区の各まちブランドを活かした産業の活性化

基本方針3

千代田区の特性を活かした3観光の振興

基本方針4

千代田区と地方相互の発展につながる4連携の推進

ここでは、商業系のまちづくりや商店街振興にかかわる基本方針2、および観光振興にかかわる基本方針3の内容についてみていくことにする。

基本方針2は、次の3つの個別方針からなる。

個別方針1 商工関係団体の活動・組織の強化

商店街をはじめとした組織の体制を着実に強化し、活動を維持していくための取組みを進める。

個別方針2 商店街の活力の維持・向上を支援

今後さらなる深刻化が想定される商店の空き店舗化への対応や大学との連携等、新たなにぎわいづくりに向けた取組みへの支援を強化していくとともに、従来通り商店街への柔軟かつ機動的な支援を行っていくことで、商店街の活力の維持・向上を支援する。

個別方針3 各街の個性を引き立たせ、魅力を強化

新たな街のシンボルとなりうる新産業や成長途上にある商品・サービス等の地域資源を活かし育てる取組みを行うことで、各街の持つ個性を一層引き立たせ、魅力を強化する。

基本方針3は、次の3つの個別方針と主な取組みからなる。

個別方針1 既存観光資源の魅力の強化、新たな観光資源の発掘・創出

区内の既存観光資源の魅力を高める取組みを強化していくとともに、新たな観光資源を発掘・創出し、これらの観光資源を目的に訪れる観光客のさらなる増加、それに伴う区内観光消費額の増加による地域経済の活性化をめざす。

個別方針2 街なか回遊の推進

ウォークアブルまちづくりデザインに基づく取組み(ハード面の取組み)と歩調を合わせながら、地域の消費を生み出す観光施策(ソフト面の取組み)を実施し、ハード・ソフトの一体的な「街なか回遊」を推進する。

個別方針3 情報収集力・発信力を強化し、“おもてなし”対応の充実を図る

区内観光のデジタル化を推進し、効率的な情報収集と効果的な情報発信に取り組むとともに、外国人等向けツアーを実施する等、“おもてなし”対応の充実を図っていく。

以上のような区の産業振興基本計画を踏まえて、神保町の未来について簡単に展望したい。千代田区には、国立劇場や帝国劇場、国立国会図書館、日比谷図書文化館、大学・研究機関に代表される伝統文化、メインカルチャーの殿堂が存在する一方で、アニメ・漫画、アイドル、メイドさん、フィギュア、コスプレ、ゲーム、SF・オカルト等からなるサブカルチャーないしポップカルチャーの発信拠点である秋葉原が存在する。文化的な位相としても、地理的な位置においても、両者のちょうど中間にあるのが神保町である。

従来、前者との関係性の側面が神保町のある種の「格式」の高さを醸し出していたが、神保町の持続可能性という観点から、訪日観光客やZ世代への対応という側面では、秋葉原との関係性が重要であろう。秋葉原がサブカル、ポップカルの発生、発信拠点であるとするならば、神保町はそのアーカイブ(情報蓄積)拠点としての魅力を高めていくことが考えられる。神保町と秋葉原はじつはツインタウンなのであって、日々変わりゆくサブカルの魅力に触れるのであれば秋葉原、その魅力を落ち着いて体験し持ち帰るなら神保町、といった関係性に焦点を合わせた“まち”としての魅力構築が必要である。その際、インターネットとAI・VR・AR・メタバース等のデジタル技術を活用し、スマホ・アプリで簡単に楽しめるような方向で進めるべきである。